二人の見た夢

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の見た夢

【Ｎコード】
Ｎ１２１２Ｍ

【作者名】
山口

【あらすじ】
サッカーの日本代表になるという夢を抱きながら、部活では補欠の俺。そんな俺の心の支えになったのは、一人のクラスメートだった。

俺と彼女の「本当の出会い」

朝起きると、かなり体調が悪かった。

ひどい頭痛と三十八度の熱があり、体もだるい。でも風邪薬を飲んだらだいぶ楽になったので、高校に行くことにした。体力には自信があるし、このくらいで休むつもりはない。ただ、サッカー部の朝練に出るのはやめておくことにした。

午前の授業も午後の授業もなんとか乗り切り、ホームルームも終わった。普通ならこの後サッカー部の午後練に出るのだが、そこまで気力がなかったので帰ることを決めた。

自分の席で荷物をまとめていると、一人の女子が横を通りすぎた。俺の後ろの席に座っている鳥井翔子だ。彼女は帰宅部である上に、ホームルームが終わるとすぐ帰ってしまう。

しかも、休み時間は「航空ファン」という雑誌を読みふけっているので、ほとんど話したことがない。仲のいい友だちもいないようだし、たぶん根暗なんだろう。顔立ちは決して悪くないが、別に関わりたいとも思わなかった。

彼女が教室を出ていってから間もなく、俺も荷物をまとめ終わり教室を後にした。薬を飲んだにも関わらず、だんだんと体が重くなってくる。やっぱり、学校を休んで寝ていた方がよかったのかもしれない。

廊下でサッカー部の先輩に会ったので、練習を休むことを伝えた。彼が「かなり顔色が悪いぞ、大丈夫か」と気づかってくれたところを見ると、体調だけでなく見た目もひどいようだ。一刻も早く帰ろうと思ったが、いよいよ体がふらついてきたので保健室に行った。

養護教諭に事情を話し、しばらくベッドで寝ていると少し楽になった。しかし、このままずっと寝ているわけにもいかない。結局起き上がり、保健室を後にした。

俺は一人でとぼとぼと、家への帰り道を歩いた。心の中は不安で一杯だった。実力がなくて補欠なのに、練習すら休んでいては絶望的だ。これでは、いつレギュラーになれるかわかったものじゃない。

今日は朝から曇り空で、一度も日が差さなかった。どんよりとしていて、まるで俺の心を映しているようだ。それを眺めていると、ただでさえ落ち込んでいた気分がさらに沈んだ。

川沿いの歩道を歩き続けていると、妙な光景が視界に飛びこんできた。川辺で一人の女の子が、巨大なプロペラの付いた機械をいじくり回している。

彼女が着ているのは、うちの高校のジャージだ。目をこらして見てみると、鳥井翔子だった。いったい何をしているんだろう。俺は興味をひかれ、土手を降りて近づいた。すぐ近くまで行ってみたが、彼女は機械をいじくるのに夢中で気づかなかった。

俺はじっくりと機械を観察した。実に妙なシロモノだ。床屋や美容院で使っているような椅子があり、その後ろには同じくらいの大きさをしたランドセル型の装置が付いている。さらに、その上には長さ十メートルくらいのプロペラがあり、ゆっくりと回っているのだ。また、ランドセル型の装置の後ろに太い棒が伸びており、横向きについているプロペラがゆっくりと回転していた。こちらは、長さ一メートルに満たない小さなものだ。

もっと細かく見てみると、椅子の両脇に左右一本ずつレバーがある。細長い鉄の棒の先端に、赤くて丸いボールが付いたものだ。

要するに、これは一人乗りのヘリコプターなのだろう。あのレバーが操縦桿なのだと思う。しかし、こんなものが空を飛べるのか大いに疑問を感じる。

俺が首をかしげていると、鳥井はようやく気づいて振り向いた。

「小笠原君！」

彼女は目を見開いた。どうやら驚かせてしまったようだ。

「ごめん、邪魔しちゃったかな」

「別にいいよ。それより、今日は練習じゃないの」

「具合が悪くて休んだんだ」
「お大事にね、早く帰って寝た方がいいよ」
鳥井は機械の方へ向き直ると、その脇に付いているスイッチを押した。途端にプロペラの回転速度が上がり、風を切る音がはっきりと聞こえるようになった。
「これ、飛べるのか？」
「もちろん」
「誰が作ったの」
「私だよ」
俺が絶句していると、鳥井は振り向いた。
「信用してないでしょ？　本当だよ。でも、設計したのはおじいちゃんなの。自分で作るつもりだったらしいけど、もう死んじゃったから」
「すごいな、高校生がこんなものを」
俺が感心していると、鳥井は満面に笑みを浮かべた。学校では一度も見せたことのない表情だ。
よく見てみると彼女はなかなかかわいい。身長は、百八十センチの俺の肩くらいだ。髪は黒のセミロングで、ぱっちりした目をしており、顔立ちはすっきりと整っている。やせ型ながら結構胸はあるようだ。
普段目立たないから全然気づかなかった。まさか、こんなところに金の卵があったとは。
じっと見つめていると、彼女はうつむいた。
「あまり見られると、恥ずかしいよ」
俺は慌てて両手を振った。
「ごめん。ところで、なんでジャージなんか着てるの」
「機械を整備するとき動きやすいから。汚れてもいいしね」
ジャージでなければ、もっとかわいいだろうに。ぜひ一度私服姿を見てみたい。
「小笠原君、今からフライトしようと思うんだけど一緒にどうかな」

唐突な彼女の申し出に、俺は目をしばたたいた。
「フライトって、飛ぶってこと？」
「そう。このスワローテイル号は、二人乗りできるんだよ」
俺は迷った。高校生の作ったものだし、危険なんじゃないだろうか。墜落したら怪我ではすまないし、下手をすれば死ぬかもしれない。
そんな俺の不安を見透かしたらしく、鳥井は苦笑した。
「心配ないよ。今日だって、家からここまで飛んできたし」
「まさか、こんな大きなものを家で保管してるの？」
彼女は大きくうなずいた。
「メインローターが折りたたみ式だから、なんとかね」
「メインローター？」
「大きい方のプロペラだよ」
その言葉を聞いて、俺はさらに不安になった。折りたたむ部分は弱い作りになっているんじゃないだろうか。そこがぽっきり折れたりしたら、どうなるかわからない。
鳥井は俺から視線をそらし、スワローテイル号の方へと向き直った。
「ごめん、体調が悪いんだったね。やっぱり一人で行くよ」
彼女の言葉を聞いて、俺は焦った。仲良くなれる機会を逃してしまうのは惜しいし、一度空を飛んでみたいという気持ちもある。何せ今まで、飛行機にもヘリコプターにも乗ったことがないんだ。
「いや、俺も乗るよ」
鳥井はゆっくりと振り向いた。
「本当？」
「うん。でも、荷物をどうしよう」
俺は教科書の入った鞄と、ジャージや弁当箱が入ったスポーツバッグを持っている。一旦家に帰って置いてきた方がいいだろうか。
「一緒に持っていけばいいよ」
鳥井はそう言いながらスワローテイル号の後ろに回り、巨大な装

置の蓋を開けた。近づいてのぞいてみると、その中には鞄を二つか三つくらい入れられそうなスペースがあった。
「こりゃ便利だな」
俺が無造作に鞄を突っ込もうとすると、鳥井に止められた。
「できるだけ、左右均等の重さになるようにして」
「なんでだよ」
「ウエイトとバランスの問題があるからさ」
俺には、なんのことだかさっぱりだった。
「わかりやすく言うとね、片側だけに重い荷物を乗っけるとバランスを崩しやすくなるのよ」
「ああ、なるほど」
「航空機が貨物を載せるときも、きっちりウエイトを計算してバランス良く搭載してるんだよ」
初めて聞く話だった。俺は鞄から数冊の教科書を取り出してスポーツバッグに移し、重さが均等になるように調節してからスワローテイル号の中に押しこんだ。
それにしても、今日の鳥井はいつもと違う。はきはきとしたしゃべり方と言い、生き生きとした表情と言い、まるで別人だ。自分の好きなものを前にすると、途端に元気になるタイプなんだろう。
「お前、工業系の専門学校に行った方が良かったんじゃないか？なんで普通の高校に来たんだよ」
すると、彼女はため息をついた。
「私もそう思うよ、近いところを適当に選んだのが間違いだった。おかげで周りの子たちと話が合わなくて」
それはそうだろう。うちのクラスの女子たちは、暇さえあれば着飾って買い物やイベントに出かけてしまう。ジャージを着て機械をいじくっているのでは、話が合わないのも当然だ。
なるほど、普段無口なのはここに原因があったのか。
そう思いながらスワローテイル号を眺め回していると、下の方にジェットエンジンがついていることに気づいた。

それにしても、なぜ大型のプロペラとジェットエンジンの二つが必要になるんだろう。駆動している回転翼で飛行するのなら、ジェットエンジンは必要ない。また、ジェットエンジンがあるのなら固定翼をつければいいんじゃないか。

「鳥井、これは回転翼とジェットエンジンのどっちの力で進むんだ」

「両方だよ」

俺は目をしばたたいた。

「じゃあ、プロペラを回すためのエンジンとジェットエンジンの二つが必要になるだろ。無駄じゃないのか？」

俺の言った通り、スワローテイル号には二つのエンジンがついており、両方ともむき出しになっている。

鳥井は一瞬目を見開いた後、俺の顔をじっと見つめた。

「単なる運動馬鹿かと思ってたけど、意外と鋭いんだね」

「なんだって！」

目尻を吊り上げると、彼女は満面に笑みを浮かべた。俺はその笑顔に心を奪われてしまい、言おうとしていた文句が引っ込んでしまった。

「ごめんね、冗談だよ。怒らないで」

「いや、別に怒ってないし」

「よかった」

鳥井は、スワローテイル号に視線を移した。

「固定翼とジェットエンジンの組み合わせだと、滑走路が必要になるんだよ。うちの近くに滑走路に使える場所はないから、回転翼を使うのは必須なの」

「じゃあ、ジェットエンジンは？」

「回転翼だけだと速度が遅いから、推進力の向上のためにつけんだよ」

俺は「なるほど」とうなずきながら機体を眺めた。

大空の旅

「小笠原君、それより早く乗ってよ」
「椅子が一つしかないのに、どうやって二人乗るんだ」
「いいから」
首をかしげながら椅子に座ると、鳥井は強引に体を重ねた。どうやら、一人用の座席に二人で座るつもりらしい。
「ちょっと待てよ！」
彼女は俺の声を意に介さず、数本のシートベルトで自分たちの体を固定し始めた。鳥井の背中が俺の体に密着しているのを見ていると、なんだか緊張してくる。ただでさえ悪い体調がさらに悪化しそうだ。
「おい、これはまずいよ！」
騒ぎ立てると鳥井が振り向いた。互いの顔が近づき、唇の距離も十センチくらいしかなくなった。やわらかそうな唇を見ていると、頭に血が上ってくる。俺は自分を抑えていられるんだろうか。
「心配しないで。スワローテイル号は、二百キロの重さまで耐えられるようになってるから」
「そうじゃなくて、こんなことをして抵抗はないのか？」
「もちろん、風の抵抗は受けるよ」
駄目だ、全然話がかみ合ってない。おそらく飛ぶことしか頭にないんだろう。俺はあきらめて、なりゆきに身を任せることにした。
彼女がスイッチを押すとプロペラが勢いよく回りだし、少しずつ機体が浮き上がった。それを見て、俺は興奮を隠せなかった。
「すっげー、本当に飛んだよ！」
俺が騒いでいる間にも、機体はどんどん空へと上っていく。もう、高さ百メートルを超えているだろう。
さっきまで俺の視界全体に広がっていた川が、だいぶ小さく見えるようになった。

スワローテイル号はさらに高度を上げた。周囲を見回すとぎっしり建ち並んだ住宅が見え、前方のはるか彼方に高層ビル群が見えた。
ここからは見えないが、あのビル群の真ん中に篠崎駅があるはずだ。県内屈指の規模を誇る駅で、六本もの鉄道が乗り入れている。まさに、ここ篠崎市の中心と言っていい。
駅の周辺に集中して建ち並んだビルは実に重々しく、どこか中世の王城を思わせるものがあった。その周辺に広がる住宅地が城下町といったところだ。中世のヨーロッパ社会が城や要塞を中心にして発展したのと同じように、篠崎市もあの駅を中心にして発展している。市内全体を見回してみて、それを実感した。
もう、どのくらいの高さまできたのかわからない。スワローテイル号のはるか下を鳥の群れが飛んでいくのが見えた。その下を歩いている人間など、豆粒くらいにしか見えない。
俺たちは今、本当に飛んでいるんだ。感動のあまり胸がはち切れそうだった。頭痛など、どこかに吹き飛んでしまっている。今の気持ちを家族や友だちに伝えたくてたまらない。しかし誰もいないので、俺は鳥井の肩を叩いて叫んだ。
「鳥井、本当にありがとう！」
「どういたしまして」
「それにしても、上がっていくだけでちっとも進まないよ」
「ゆっくり景色を見せてあげようっていう心使いだよ、そろそろ出発するね」
鳥井が脇のスイッチを押すと、スワローテイル号はすさまじい速度で前進を始めた。風圧が顔を歪める。俺は仰天して、彼女の耳元で叫んだ。
「もう少しゆっくり進めないのか！」
「わかった、少し遅くするね」
速度は落ちたものの、俺はすっかり怖くなってしまい、両手を回して鳥井に抱きついた。自分の顔のすぐ隣に彼女の顔がある。少しは反応するだろうと思ったが、その表情にはなんの変化もなかった。

「お前、怖くないのか」
「もちろん怖いよ」
「全然そうは見えないぞ」
「怖いよ、長距離を飛ぶのは今日が初めてなの。免許を取ってから間もないしね。もしかしたら墜落するかもしれない。そのときに一人で死ぬのは嫌だから、小笠原君を道づれにしたってわけ」
思いがけない言葉に絶句していると、鳥井は笑いだした。
「冗談よ、誰かと感動を分かち合いたかったの」
その相手に俺を選んでくれたのは、単なる偶然だったのだろう。それでも光栄だ。空を飛ぶのは楽しいし、鳥井と一緒にいることも嬉しい。
スワローテイル号は前方のビルを目指して、まっすぐに飛んでいく。しばらくすると、だんだん恐怖が薄れてきた。気持ちに余裕ができた俺は、彼女に疑問をぶつけてみることにした。
「なんで空を飛びたいと思ったんだ」
「グランド・キャニオンの上空を自作のヘリコプターで飛ぶのが、おじいちゃんの夢だったんだよ。でも死んじゃったから、私がそれを受け継いだってわけ。いつか遺影を抱いて、グランド・キャニオンの上を飛んでみたい」
「途方もない話だな」
鳥井は笑いながらうなずいた。
「小笠原君の夢は何」
「サッカーの日本代表になって、ワールドカップに出場することだよ。それだけじゃない、日本を優勝に導いてやるんだ」
鳥井が吹き出したのを見て、俺は真っ赤になりながら主張した。
「笑うなよ。今は部活の中ですら補欠だし、無茶なことはわかってる。でも、夢は大きく持った方がいいだろう？」
「そうね、ごめん。それにしても、本当に途方もない話だね」
「お互い様だろ」
俺たちは声を合わせて笑った。

「私の『翔子』って名前は、おじいちゃんがつけてくれたんだよ。『いつか鳥のように翔けてほしい』っていう願いを込めてね。その気持ちに応えるためにも、私はがんばるよ」
「おう、がんばれ。応援するよ！」
俺は、二人の気持ちが一つになっていくのを感じた。
「鳥井ってなかなか魅力的だよな、結構好きなタイプかもしれない」
すると、彼女は黙りこんだ。その顔が見る見るうちに赤くなり、さらに耳まで染まっていく。どうやら、この一言で男女の関係を強く意識してしまったようだ。俺は慌てて口を開いた。
「ごめん、あまり気にしないでくれよ」
何度も声をかけたが、彼女の耳には届いていないようだった。これはまずい。パイロットが冷静さを失ってしまったら、墜落事故すらあり得る。
どうしようか迷っていると、突然鳥井が脇のスイッチを押した。機体は急に速度を上げ、前方のビルに向かってまっしぐらに飛んでいった。
「おい、どうした！」
叫んだが、まるで反応がなかった。その間にもビルとの距離はどんどん縮まっている。もう百メートルをきっているだろう。このままだと、衝突して確実に死ぬ。
「夢をかなえずに死ぬつもりかよ！」
耳元で怒鳴ると、鳥井の体が一瞬大きく震えた。どうやら効果があったらしい。彼女が右脇のレバーを大きく前に倒すと、スワローテイル号は斜め右下に方向を変えた。もう少しでプロペラがビルの窓に接触するところだったが、ぎりぎりで衝突は回避できた。なんとか助かったようだ。俺は安堵のため息をついた。
「ごめんなさい。私、何をしてたんだろう」
「いいよ、それにしても極端な奴だな。男と一緒に座っても気にしないくせに、好みだって言われた途端にこれとはね」
鳥井はしばらく沈黙した後、再び口を開いた。

「男子と親しくする機会がなかったから、自分が女であるという自覚がなくなってたのよ。でも、それが元に戻ったの」
「じゃあ、今の心境は？」
「小笠原君とくっついてるのが、恥ずかしくてたまらないよ」
鳥井が相変わらず顔を真っ赤にしているのを見て、俺は気の毒になってきた。これ以上ストレスを与えるのもかわいそうだ。
「そろそろ戻ろうぜ」
彼女はうなずき、右脇のレバーをさらに倒した。機体が大きく旋回し、もと来た方向へと進路を変える。後は帰るだけだ。
その後、鳥井は一言も口を聞いてくれなかった。何度声をかけても反応すらしてくれない。俺はしかたなく、黙って彼女にしがみついていた。
川が見えてくると、スワローテイル号が高度を下げた。楽しかった空の旅もそろそろ終わりだ。

お互いの夢へ

そのとき突然、機体を叩くような音が聞こえてきた。不審に思い見回すと、エンジンから煙が噴き出ている。俺は仰天して鳥井の肩を叩いた。

「煙が出てるぞ！」

彼女は唇を噛んだ。

「飛行時間が長すぎてオーバーヒートしたのね」

「なんだって！」

「どっちのエンジンから出てるの」

「二つともだ！」

思わず目の前が真っ暗になった。まだ十七年しか生きていないのに、墜落して死ぬなど絶対にごめんだ。

「どうすりゃいいんだよ！」

「落ち着いて。エンジンが止まっても、オートローテーションを使えば安全に着陸できるから。空気を利用してゆっくり降下する技術だよ」

そうは言われたものの、全身から流れ出る冷や汗は止まらなかった。今まで一度も味わったことのない死の恐怖が、じわじわと心を絞めつける。悲鳴を上げたいところだが、男としての意地がそうさせなかった。それに俺が取り乱したら、鳥井も冷静さを失ってしまう可能性がある。そうなれば最悪の事態を招きかねない。

機体はさらに高度を下げ、地上二十メートルくらいまで降下した。もうすぐ川岸に着陸できる。胸を撫で下ろしかけたそのとき、鳥井が叫んだ。

「コントロールが効かない！」

俺は言葉を失った。万事休すだ。さらに追い討ちをかけるように、機体の後方が炎上した。燃料に引火すれば爆発して一巻の終わりだ。

見下ろすと、下は川面だった。こうなったら覚悟を決めて飛び降

りるしかない。
「よし、飛び降りるぞ！」
すると、彼女は半泣きになりながら俺を見つめた。
「私、泳げないよ」
「なんとかする、信じてくれ！」
鳥井はうなずくと、シートベルトをはずした。
「行くぜ！」
俺は彼女を抱きかかえると、川面めがけて飛び降りた。下が水であるとはいえ、二十メートルの高さから落ちたら相当な衝撃だ。頭から叩きつけられたら危険なことこの上ない。
幸いにも、俺たちの体は足から落下していった。あとは衝撃になんとか耐えて、川岸まで泳ぎつけば命は助かる。
体が水面に達したかと思うと、川の底近くまで沈みこんだ。両足と下腹部に鈍い痛みを感じたが、なんとか我慢した。周囲には緑色に濁った水が広がっている。藻が足にからみつき、なかなかうまく動けない。
俺は懸命に藻を振りほどき、鳥井を抱えて泳ぎだした。彼女が全然動かないのは心配だが、今は陸に上がることが先決だ。必死で泳ぎ続けて水面から顔を出すと、鳥井も息を吹き返した。
「背中につかまれ！」
彼女が背中にしがみついたことを確認すると、俺は平泳ぎで川岸を目指した。まだ夢を実現させていないのに、こんなところで死んでたまるか。今まで、サッカー部の誰よりも努力してきた。みんなが帰った後にも一人で練習をしたし、筋トレも欠かしたことがない。それに、鳥井にだって立派な夢があるんだ。彼女のためにも、俺がここでがんばらなきゃ。
潜ったときに水を飲んでしまったらしく、酷い吐き気がする。それに、体調が悪いせいでなかなか力が入らない。だが必死の努力が身を結び、遂に俺たちは川岸に到達した。なんとか陸に上がったものの、鳥井は半分死んだような顔をしていた。

「小笠原君、ごめんね」
「助かったんだからいいよ。それより、スワローテイル号はどうなったんだろう」
周囲を見回すと、対岸に墜落して炎上している機体の残骸が目に入った。俺の鞄も教科書も、たぶん灰になってしまっただろう。
「しょうがないな。鳥井、帰ろうか」
そう言って歩き出そうとしたところで意識が遠くなり、俺はその場に倒れこんだ。

気がつくと、俺は病院のベッドに寝ていた。脇に両親が座っていて、目を覚ましたのを見て喜んでいる。
「どうしてここに」
そうつぶやくと、母さんが口を開いた。
「鳥井さんっていう女の子が、救急車を呼んでくれたのよ」
「そうか、あいつが」
両親はしばらく言葉を交わした後、病室を出ていった。彼らの話によると俺の体に異常はなく、一日だけようすを見て問題がなければ退院できるらしい。
しかし、異常がないとは言われたものの、疲れきっていて起き上がる気力すらなかった。鳥井に会いたいところだが、これではどうにもならない。
何もすることができないので寝ていると、枕元に誰かの気配がした。目を開けると、ピンクのパジャマを着た鳥井が立っていた。
「私も一日だけ入院になっちゃったよ。救急車を呼んでくれるように近くの人に頼んだあと、気絶しちゃったらしくてさ。原因は極度の疲労と緊張だって」
「じゃあ無理しないで寝てろよ、起きてちゃだめだろ」
「どうしても謝りたくて」
彼女はそう言いながら眉をひそめた。
「ごめんね、あんなひどい目にあったのは全部私のせいだよ」

その瞳から一筋の涙が流れ出し、頬を伝って膝に滴り落ちた。本当に辛そうな顔だ。
自分のミスを後悔しているのだろうし、スワローテイル号を失った悲しみも感じているのだろう。
「もうヘリコプターを作るのはやめるよ。今回のミスで本当に懲りたから。夢もすっぱり諦める。迷惑をかけて本当にごめんなさい」
俺は笑顔を浮かべた。
「お前の夢は、それくらいで諦めちまうような安いものだったのかよ。たかが一回の失敗で投げだすことなんか絶対にない。全力で応援するから、これからもがんばれよ」
鳥井は声を上げて泣きだした。
夢に向かって生きているのは、俺も彼女も同じだ。できることなら、彼女のパートナーになりたい。二人で励ましあいながら夢に向かって歩いていけたなら、とても素敵なんじゃないだろうかと思う。
俺は鳥井の右手をつかみ、しっかりと握りしめた。その手は、あのヘリコプターを自分で作って操縦していたとは思えないほど小さくか細いものだった。
「むしろ今回のことで、お前のことを気に入った。ぜひ友だちになってくれよ、それ以上の関係でもいいぜ」
彼女は泣きやみ、大きく目を見開いた。
「私なんかでいいの？」
「ああ。お前以上の女なんて、そうそういるもんじゃない」
「嬉しいよ、これからもよろしくね」
俺たちはしっかりと、お互いの手を握りしめた。これから先、この手を離すことなく一緒に歩いていきたい。俺は、心からそう思った。　（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1212m/

二人の見た夢

2011年6月25日22時25分発行